



子育てサポート推進チーム事業

発達臨床コンサルテーションについて学びました

こどもみらい館では、平成17年度、18年度の2ヶ年間にわたり、文部科学省の委嘱事業として、保育カウンセリングや保幼小連携について研究する「子育てサポート推進チーム事業」を実施してきました。その一環として、昨秋、首都大学東京の浜谷直人教授を講師に招き、研究協力園と派遣カウンセラーの方々を対象とした検討会を開催いたしました。浜谷教授は、巡回相談をカウンセリングではなく、コンサルテーションと位置づけ、相談員（コンサルタント）は、保育者（コンサルティ）の機能を改善することを媒介

にして子ども（クライアント）の状態を改善するという間接支援を重視されています。検討会では、「保育者や園が保護者からコンサルテーションの了解を得る過程や相談依頼書を作成する過程で、子どもの指導において何が問題で、これまでどのような指導をしてきたかを振り返り、反省することにもなる。そうした過程自体が事態改善の一歩となると同時に、保育者、職員と園の保育力の活性化になる」と強調されました。今回の講演要録も盛り込んだ事業報告書を、近く各保育所・幼稚園に送付する予定です。

Information



子どもを共に育む京都市民憲章

去る2月5日、京都市では、子どもを健やかに育む社会を目指し大人が何をすべきかを明記した「子どもを共に育む京都市民憲章」を、多くの市民の皆さんの声を盛り込み策定しました。憲章は、「子どもの存在を尊重し、かけがえのない命を守ります」「家庭の生活習慣と家族の絆を大切にします」など6項目を謳いあげています。子育て家庭はもとより、共に地域全体に広めていただきたいと思います。



こどもみらい館2階ロビーに研究・研修資料閲覧コーナーを設置

こどもみらい館では、保育士・幼稚園教諭の皆さんの自己研鑽を応援できるよう、2階ロビーに資料書庫と閲覧スペースを設けます（4月から利用していただけます）。各所・園で取り組まれた研究資料や報告書など、この機会に是非ご提供ください。京都の保育・幼児教育の成果を広く収集・発信・活用できればと考えています。

明橋大二さんの講演をインターネット発信中

「子育てハッピーアドバイス」の著者、明橋大二さんを招いて昨年7月に実施したこどもみらい館の特別セミナーをインターネットで動画配信しています。
京都市教育委員会生涯学習部の「インターネットまなびや京都」（<http://www.edu.city.kyoto.jp/shogaigaku/>）をご覧ください。

共同機構研修会 ビデオ・DVD貸出中

共同機構研修会に参加できなかった方々も、当日の講義を収録したビデオ（講師の先生のご了解をいただいた講義のみ）で学んでいただけます。所・園内研修にご活用ください。

新たに増えたビデオ・DVD

お申込みは、こどもみらい館事務室まで。

神山 潤 東京北社会保険病院副院長 「睡眠を奪われた子どもたち」 （1月20日実施分）



学習意欲がひしひしと伝わる研修会場。モニターを通じて別室で学ぶ聴講者も。

こどもみらい館では、昨年度に続き夜間の連続講座を開催いたしました。テーマは、昨年度の「気になる子ども」を引き継ぎ、さらに深める形で「発達に障害のある子どもとのかかわりと支援」と題して、京都大学医学部精神医学教室助手の岡田俊さんに3回にわたってお話いただきました。

科学的・専門的な知識を深める講義と保育士・幼稚園教諭のみなさんが実際に現場で悩んでいる事例などを質問紙に出し合いながら、具体的な対応等についても学び考える貴重な機会となりました。

この連続講座は、文部科学省委嘱の子育てサポート推進チーム事業の一環として実施したもので、3月下旬には、報告書としてまとめ、各園・所に送付する予定です。

もくじ

こどもみらい館共同機構研修会から

・育ちと学びの連続性

奥山登美子氏 京都ノートルダム女子大学心理学部教授

・睡眠を奪われた子どもたち

神山 潤氏 東京北社会保険病院副院長

Topics

こどもみらい館 健康相談事業

・子育てを学び楽しむ「こどもみらいすくすく教室」

・「こどもみらいすくすく教室」DVDの貸出しを行っています

子育てサポート推進チーム事業

・発達臨床コンサルテーションについて学びました

Information

・子どもを共に育む京都市民憲章

・こどもみらい館2階ロビーに研究・研修資料閲覧コーナーを設置

・明橋大二さんの講演をインターネット発信中

編集後記

編集後記

暖冬で日本の各地では梅や桜が咲き、ヒマワリまで咲いたというニュースをきき、異常…?と思われる事は自然界だけではなく、子どもたちの世界にも「いじめ」や「自殺」が相次ぎ起こっています。草花に種や芽があり、それをとりまく環境がある。子どもたちにも種や芽があり…そして環境に左右されている。人は人と人の触れ合いの中で育ち、明日を見つけていきます。ちょっとした子どもの姿をしっかりと受けとめ、未来ある子どもたちにより環境をつくっていく、今私たち大人の大きくて、大切な課題です。

皆さん 一緒に手をつなぎましょう。

研究・研修部委員 福田 由美（洛北幼児園主任）



この冊子は古紙100%の再生紙に大豆油インクを使用しています。

育ちと学びの連続性

講師・奥山 登美子 氏

神戸大学教育学部（現・発達科学部）附属幼稚園33年（副園長経験11年を含む）・神戸市立幼稚園に1年勤務する。平成17（2005）年4月より、京都ノートルダム女子大学心理学部教授。著書に「育ちあう乳幼児教育」、神戸大学発達科学部附属幼稚園研究紀要に「人間らしくよりよく生きるための道徳性の芽生えを培う」「教育課程と指導計画」など



記録の重要性

毎日記録をとっていますか？指導計画をたてていますか？一人一人に即した指導をするには、日々、指導計画をたてないとできません。エピソードなどの事実を基に子どもを見ないと子どもの育ちは見えてきません。

小学校以降はプランが先にあります。やり方はいろいろと考えられますが、「この時間にはこれがわかるようになる」等のねらいは最初から存在します。しかし、幼稚園では環境を通した教育が行われています。一人一人の発達に即した、総合的な指導がなされています。その中から、「この子が今学んでいることは何？」と読み取っていくことが大切になります。一人一人の「学び」を読み取るには、一人一人の記録が不可欠です。その子の言葉や表情、しぐさ等から何が学びとなっているかが分かるからです。

「学び」を記録に落とそう

以前に勤めていた神戸大学発達科学部附属幼稚園では、幼稚園から中学校までの教員が集まって、昭和51年からの3年間で幼小の連携カリキュラム、平成5年からの3年間で中小的連携カリキュラムをつくっていました。幼稚園教育要領から学習指導要領まで紙面の上では繋がりが、その学習内容に沿って取り組みました。しかし、教師の頭の中ではカリキュラムは繋がっているのですが、子どもたちのカリキュラムでは何かがうまくいっていないのです。例えば、小学校のグループ学習の中で、その日のめあてに沿って取り組んでいる子どもは全員ではなく、特定の役、例えば他の子どもが間違っ書いてところを消す係りをしている子どもがいたりします。そうすると、その子どものその時間の「学び」は一体何なのでしょう？それでよいのでしょうか？その「何か」を探るため、

平成12年からの3年間、幼稚園・小学校・中学校の教員約50名が、3歳から15歳までの子どもの「学び」を記録に落とすことに取り組むことにしました。子どもたちの「学び」をみてカリキュラムをつくっていくことで、自分たちが望んでいる子ども像が見えてくるのではないかと考えました。「学び」を考えるには、まずは事実をきちっと記録し、そこから自分たちの解釈をし、そして学びを読み取ることだと、「事実」「解釈」「学び」の3項目を入れたフォーマットを作りました。毎日記録し、それを持ち寄り、分析検討することで、12年の連携したカリキュラムをつくろうと考えたのです。

1年目はたいへんでした。フォーマットが埋まらないのです。幼稚園の先生は、「事実」と「解釈」は書けます。しかし、「学び」がなかなか書けません。文章にできないということは、人に伝えられないということです。これは幼稚園の先生の課題です。一方、小学校以降の先生は、「学び」と「解釈」は書けます。ただし、すべての子どもの「学び」が「1+1=2がわかる」という同一のものとなります。そして、「事実」が書けません。これは大きな違いでした。

「一人一人の学びに即して指導をする」というのなら、理想的に言えば一人一人の指導計画がないといけないはずですが、それはなかなか難しいことです。附属幼稚園では、まずは60パーセントの子どものねらいを大きく書き、評価の観点をした時に、そのねらいから早い子ども、遅い子ども、その日そのことが育とうとしている子ども等の個人への働きかけを特記として付け加えていました。

意識して書くということは、意識して関わるということです。指導計画通りうまくいけば、翌日も続けていくことができます。うまくいかなければ、育ちの捉え方が間違っていたのか、捉え方は合っていたが指導方法がよくなかったのか等を見直し、指導計画を立て直していくことができます。

子どもの姿を見て、記録をし、学びをそこに落とす、意識してプランをたて、意識して指導し、意識して再考察する。小学校ではPlan-Do-Seeですが、幼稚園ではSee-Plan-Doで、またSeeとつなげていくことが大切です。

環境を通して

保育室に置いてある積み木の数を知っていますか？何をいくつ置く、誰が何をいくつ使う等を考えてきちんと計画していますか？置いてある物にはすべて意図があります。学びがあるから置いてあるのです。

例えば3歳児のクラスでは、できるだけたくさん出します。欲しい物を存分に使って自己発揮して欲しいからです。4歳児になると物の数も遊びも精選します。人間関係が育つ時期だからです。人と関わらざるを得ないような物の数や遊びの内容を考えて計画する必要があります。

そのようなことを振り返って保育室を見直してみてください。それが意図的、計画的な保育です。

集団を意識して

以前、研究で一人の先生が一日の内に見られる子ども数を調べたところ、5歳児のクラスで25.6人という結果がでました。35人のクラスでは後の10人は放ってあることになるのでしょうか？幼稚園は集団で生活しています。子ども同士関わり合い、育ち合います。先生が指導しても変えられなかったことが、仲のよい友達の本気の関わりから気付くこともあります。幼稚園は、先生がすべてを指導するのではなく、子ども同士がお互いに学び合える協同的な学習の場であることを意識して指導計画をたてるのが重要なのです。

3年保育の5歳児になると、お互いのよさに気付き合い、自分たちで自分たちの問題を解決する姿が見られます。そのような子どもに育つには、3歳児の4月から頭に入れて取り組んでいかなければなりません。

子どもが起きている時間を12時間と考え、家庭と地域、幼稚園で等分して過ごすという考え方から、原則4時間という幼稚園での保育時間が設定されました。現在の幼稚園で重視しなければならないのは、体を動かすことや自然と関わること、そして「人間関係」を育てることです。「お友達が大好き」「自分の気持ちをみんなの前で出せる」「ここでは出してもいい、ここで

はダメ」という人間関係の育ちは集団教育の中でしか培えません。幼稚園には集団教育に初めて入ってくる子どもたちがほとんどです。家庭の中で親との信頼関係ができていて、できていないに関わらず育てていかなければなりません。それゆえ、指導計画の中で「集団」を意識してすすめることが大切なのです。

自分自身のグレードアップ

人はそれぞれ価値観をもっていますが、私たちは教師としての教育観、子ども観をもっていなければなりません。それをどうやって育てていけばよいでしょうか。それは子どもの姿を記録に落とすことです。記録をする時には解釈は入れずに事実を書きます。その事実を先生同士見せ合い、話し合うことです。「〇〇と思う」という感覚ではなく、「〇〇である」という考えを出すことが大切です。どうしてそう考えたかの「なぜならば」まで考えてみましょう。そこが教師にとっての「学び」であるからです。そして、他人の「なぜならば」を受け止めていけたら、自分自身を広げていくことができるのです。

教師集団の話し合いの中で「なぜならば」を押えていきましょう。そうするとベテランの先生は無意識のうちに捉えて保育している「なぜならば」を意識化することができます。その「なぜならば」を若い先生が聞くことによって、教師として育っていくことができます。どうぞ、自分自身をグレードアップしていきましょう。

【平成18年10月26日】



睡眠を奪われた子どもたち

講師・神山 潤氏

東京北社会保険病院副院長。小児科医。日本睡眠学会理事。早寝早起き朝ごはん全国協議会参加団体の一つ、子どもの早起きをすすめる会代表。書著に「睡眠の生理と臨床」「子どもの睡眠」「眠りを奪われた子どもたち」他多数。



一日の周期で変化する生理現象

人は24時間いつも同じに動いているロボットではありません。例えば自律神経系には、昼間働く「交感神経」と夜間働く「副交感神経」があります。交感神経が働いている時には、心臓がドキドキし血液が脳や筋肉にたっぷりといきわたり、物を考えたり体を動かしたりするのに適切な状態をつくっています。副交感神経が働いている時には、心臓の動きはゆっくりとなつて、血液は腎臓やお腹にいて、おしっこをつくったりウンチを肛門に押しやったりします。昼間と夜とでは、体の中で起きている現象が違うのです。

人間には、サーガディアンリズムというおおよそ一日の周期で変化する生理現象があります。その代表的なものが「体温」「睡眠・覚醒」「ホルモン」です。「体温」は朝が一番低く、午後から夕方にかけて一番高くなり、1度位の差があります。「睡眠・覚醒」は「朝」の光で目覚め、暗い「夜」になったら寝入るということです。「ホルモン」の代表的な成長ホルモンやメラトニンの分泌は夜に高く、ストレスに対応するためのコルチコステロイドは朝が高く午後から夕方の下るなど、時刻によって分泌量が変わります。

睡眠と覚醒

睡眠・覚醒については大きな誤解が3つあります。1つ目の誤解は「夜寝入ったら、朝までぐっすり眠る」ということです。眠りには、深い眠りもあれば浅い眠りもあります。夢を見ている時もあればそうでない時もあります。外見を見ているだけでもわかります。脳波も起きている時と同じようになります。大人の場合、平均で4~5回、90~100分の周期で眠りが浅くなります。0歳児が40分、1歳児が50分、2歳児が70分、5歳児が80分というデータがあるように、小さい子どもほど短い周期で眠りが浅くなります。

2つ目は「子どもは夜になったら寝るものだ」という誤解です。だれしもが脳の中に生体時計をもっています。生体時計は、様々なリズムをコントロールしており、大多数の人が

地球時間の24時間よりも長くなっています。明るさが一定で時計のない場所に閉じ込められると、体内の生体時計は少しずつ後ろにずれていきます。これをフリーランと言います。しかし、私たちは朝の光をあびることにより、無意識に体内時計を地球時間に合わせています。生まれたてのあかちゃんは3時間ごとに起きたり寝たりを繰り返しますが、1ヶ月頃から朝の光により調整しようとし始め、3ヶ月頃には同調することができるようになり、起きる時間や寝る時間が一定になってきます。早くから眠くなったりする子どもは、昼間によく動いて疲れている場合です。ポイントは昼間の活動だということです。しかし、現在は子どもの昼の活動が保障されない世の中になってしまっています。そのため、「子どもは夜になったら寝る」とは言えなくなっています。

3つ目は「睡眠時間はいつとってでもいい」という誤解です。「目覚まし時計」は脳にあります。目と目の間の奥にある視交叉上核が太陽の光を認識することによって生体リズムを調整しています。朝、光を浴びることによって周期が短くなりますが、夜中に光を浴びてしまうと周期が長くなってしまいます。そのことから、いつ寝ていつ起きてもいいということではなく、夜暗くなったら寝て、朝明るくなったら起きることが大切なのです。

子どもの行動チェックリスト (CBCL)

4歳から6歳の規則的生活児70名、夜型・不規則生活児70名の保護者に対して113項目の質問に答えてもらうという形でデータをとりました。すると、早寝早起きし、規則正しく生活している子どもの問題行動は少ないという結果になりました。睡眠時間に関しては差が見られませんでしたので、長時間寝るということよりも、規則正しく早寝早起きすることが、子どもの問題行動を減らす方向に働くようです。

日本の子どもの睡眠事情

日本ではあかちゃんの約半数が10時以降に寝ていますが、ヨーロッパでは7時以前に3割ほどが寝ています。高校生にな

ると深夜0時以降に寝ている人が6割になります。様々なデータから、日本人はあかちゃんから高校生まで夜更かしです。こんな国はありません。

本来覚醒度の一番高くなるはずの3・4時間目に眠たくなる子どもが多くみられ、中学女子では80%にものぼります。生物学的にも、学習効果としても問題があります。教育再生会議の中でもゆとり教育の見直しが言われていますが、たとえ授業時間数を増やしても、寝ていてはなんにもなりません。生活習慣の改善の方が重要なのではないのでしょうか。また、夜更かしの結果、幼児期の子どもは物事に集中できない等の問題行動として表れます。睡眠不足の解消に昼寝を取り入れる高校もあるようですが、昼寝はあくまでも昼寝です。15分位が目安で、30分以上してはいけません。また、昼寝は個人差が大きいものなので、昼寝の時間をつくってはいけません。昼寝をしてもいい時間にしてください。

それでは夜更かしをして何をしているのかというと、勉強をしているのではなく、テレビやゲーム、インターネット等に関わっていたり、家族が起きているからなんとなく起きていたり等です。子どもの体が夜更かしに適した体になったのではなく、不適切な睡眠環境になってしまっているということです。

夜更かしの問題点

夜更かしをしていると、朝寝坊をしても睡眠時間が短くなるというデータがあります。また、短い睡眠時間を続けると、生活習慣病現象が見られ、老化と同じ現象が現れることがわかりました。遅寝と肥満の関係もわかってきました。子どもも睡眠時間が減ると、イライラしたり学力低下も見られます。学力と就寝時間の関係を表したデータからも学力上位群の子どもの半分は9時30分前には寝ています。10時30分以降に寝ている子どもの中に学力上位群の子どもは誰一人いません。睡眠時間を削って勉強しても学力にはならないのです。人は眠って食べないと活動の質が高まらないのです。朝食の欠食と就寝時間の関係を見てみると、早く寝ている子どもはほとんど食べていますが、0時以降に寝ている子どもは半数以上が食べていません。早く寝ないと、朝ごはんを食べられないのです。また、毎日朝食を食べている子どもの方がペーパーテストの点数が高いというデータもあります。しかしここで注意してほしいのですが、朝食をとっているということは、生活習慣のめやすの一つでしかありません。朝食を食べたらからといって、すべてがうまくいくというものではありません。人は、寝て、食べて、初めて活動できる動物です。この3つは密接に関連していることを確認してください。寝さえすればすべてうまくいくというふうに誤解しないでください。

メラトニンは老化防止や抗癌作用を促進する抗酸化作用やリズム調整作用、そして性的な成熟の抑制を行うホルモンとして知られています。1歳から5歳が一番たくさん出るので、

メラトニンの分泌は光で抑えられます。昼の光をたくさん浴びると増え、夜の光をたくさん浴びると減ってしまうことがわかってきました。夜更かし朝寝坊するとメラトニンの量が減ってしまうのです。

朝の光による同調を行わないと、地球時間との差が生じ、慢性の時差ぼけ状態になります。これを内的脱同調と言います。早く起きると昼間は元気に活動できます。たっぷり動くと疲れて早く寝ます。実際に早起きすると外遊びが多くなるというデータもあります。

このような背景において関心をおいているのが、セロトニンという神経伝達物質です。セロトニン神経系が障害をうけると様々な精神的な不安定が起きると言われています。動物においてセロトニンを少なくする実験を行ったところ、攻撃性が増したり孤立化したりする結果が得られました。セロトニンを活発化するには、歩行、咀嚼、呼吸などのリズムカルな筋肉運動を行うことです。慢性の時差ぼけ状態ではリズムカルに活動することは難しくなります。そして最近、朝の光が直接セロトニンの分泌の促進に関わっているということも分かってきました。

テレビがついている時間が長いと、見ていようがないが、寝る時間が遅くなるというデータがあります。長時間のメディアとの接触による障害は、太るというデータがありますが、もう一点、生身の人間と関わる時間を奪ってしまうため、対人スキルが育まれていかないという大きな問題があります。すぐに改善することは難しいのですが、子どもには大人が働きかけなければできません。毎日遅く寝ていたのに、急に早く寝ることは難しいので、まずは、早く起きることから始めてください。起きられない場合は、たたき起こしてでも起こすことです。コルチコステロイドの分泌を促すACTHは朝起きたい時間の前から分泌が始まります。「明日は何時に起きるぞ」と気合をいれて寝ることが有効です。

文部科学省では「早寝、早起き、朝ごはん」と唱えていますが、私はあえて、「早起き、早寝、朝ごはん」の順に、そして「朝ウンチ」を加えておきたいと考えています。

【平成19年1月20日】



こどもみらい館健康相談事業

子育てを学び楽しむ 「こどもみらいすくすく教室」

こどもみらい館では、平成14年から京都小児科医会との共催で、生後6箇月までの乳児を持つ保護者等を対象に、子どものこころとからだの発達の基本を学びあうことにより、不安感や孤独感を軽減し、いきいきと子育てを楽しむことを目的として、「こどもみらいすくすく教室」を開催しております。

今年度は6回の連続講座という方法で実施し、毎回約50組の親子が参加されました。子どもの月齢が近いこと、疑問や悩みを共感しやすく、回を重ねるごとに受講者同士の交流が進みます。6回の講義がすべて終了する頃には、会場にたくさんの輪が生まれていました。今年度の講義は次のような内容でした。

第1回 乳幼児の病気について

「子どもの急な病気であわてないために」

講師 山内医院小児科医 山内 英子 氏
発熱、下痢・嘔吐、咳、けいれん、原因不明の泣きわめき、発疹など、子どもの急な病気の主な症状から、病院に行ったほうが良い場合と緊急性のない場合、また、家庭ではどのような対応をすれば良いか、詳しく講義をしていただきました。その他、知っておきたい子どもの病気、上手な医療のかかり方等についてもお話をさせていただきました。

第2回 乳幼児の食生活について

「食えることが楽しい子に」

講師 京都市保育課管理栄養士 大西 美佳 氏
子どもにとって「食えることは生きること」とし、現代社会における食生活の問題点、からだを育てるだけではない食の役割についてお話をいただきました。また、離乳食の進め方を成長の段階に分けて、離乳食の硬さ、スプーンの動かし方などを具体的に講義していただきました。

第3回 事故の防止について

「子どもの事故は防げる！」

(会場：京あんしんこども館)
講師 京あんしんこども館センター長 澤田 淳 氏
「京あんしんこども館」を愛称とする「京都市子ども保健医療相談・事故防止センター」は、市民からの小児医療の相談を受ける一方で、子どもの事故データを収集・分析し、予防対策を提供されています。

1～4歳の子どもの死亡原因の1位は、交通事故や家庭内での不慮の事故であり、事故は周りの人の注意で未然に防ぐことができるかとされています。家庭の中ではどのようなことに気をつければよいかを講義していただき、そのポイントをモデルルーム化した「子どもセーフティハウス」などを見学しました。また、小児科に来院する子どもの中には、事故でなく虐待が原因と見られる怪我を負った子どもがいることから、保護者の中には虐待と認識せずに虐待を行っている場合もあること、子どもを危険から守るのは誰でもない保護者であることについても注意を促されました。

第4回 歯の健康について

「歯を大切に」

講師 京都市健康増進課歯科衛生士 中村 雅子 氏
保護者が子どもの歯の健康について正しい認識を持てるように、乳歯の役割、歯の生え方・磨き方、また気をつけたいむし歯菌や食習慣等について講義をしていただきました。さらに、子どもが歯磨きを楽しみと思えるように、具体的にどう関わればよいのか、実践的に説明していただきました。

第5回 乳幼児の心の発達について

「子どもの心が育つには」

講師 京都市児童福祉センター小児科医 市川 澄子 氏
脳は知性、感情、情緒など様々な精神活動を司り、その神経組織のほとんどは1歳までに形成されます。「こころの安定」を築く大事なこの時期に、保護者としてどう接することができるのか、こころとからだの発達理論から講義をしていただきました。

第6回 子育て座談会

「親学(親楽)のススメ」

講師 こどもみらい館 浅野 明美 館長
受講者をランダムに6班に分けて、グループワークを行いました。グループワークを進めるにあたって、初めに自己紹介と簡単なゲームをし、受講者の緊張を解きました。また、自由にそして相手の意見を尊重するために、一人ずつ順に話すというルールを決め、活発な意見が出るように促しました。十分に話し合いがもたれた後で、どのような意見が出されたかをグループごとに発表していただき、そこで出た質問等に館長が応じました。



「こどもみらいすくすく教室」DVDの貸出しを行っています

平成17年に実施した「こどもみらいすくすく教室」をDVDに収録いたしました。小児科医や歯科衛生士による講義は、育児中の保護者だけでなく、子育て支援関係機関職員の方々の資質向上にも役立てていただける内容です。各機関の職場研修等に活用していただければ幸いです。(VHSビデオ版もあります。)

タイトル

- 「子どもの急な病気であわてないために」
青木小児科医院院長 青木 修一郎 氏
- 「事故は防げる!」
吉祥院こども診療所所長 今井 博之 氏
- 「歯を大切に」
京都市健康増進課歯科衛生士 中村 雅子 氏
- 「子どもの心が育つには」
京都桂病院小児科医 中沢 由美 氏



1 貸出対象

市内の保育所(園)、幼稚園、昼間里親、保健所、子ども支援センター

2 申込み

- (1) 申込方法
電話又はFAXでご確認ください。「こどもみらいすくすく教室DVD貸出申込書」を提出していただきます。
- (2) 申込責任者
申込責任者については貸出対象施設の長とします。

3 貸出し

- (1) 貸出枚数
1回の貸出につき1枚とします。
- (2) 貸出期間
貸出日から1週間以内とします。
(休館日にあたるときはその翌日)
- (3) 貸出条件
DVDは当該職場研修に限り貸し出します。
(転貸禁止)

申込先 こどもみらい館 事業課 相談担当

連絡先: TEL 254-5001
FAX 212-9914
受付時間: 午前9時から午後5時まで
休館日: 毎週火曜日及び年末年始